

要 旨

本研究では、今の自分にできることは何かを考える力の育成を目指すことが、よりよい判断力の育成につながると考えた。そこで、道徳の時間において生命尊重の道徳的価値を内面的に自覚させる授業の在り方の研究を行った。身近な人の体験談から実話資料を作成することで児童に実感を伴わせることにした。さらに、児童の内容理解と心情把握を手助けする手立てとして、資料の提示方法の工夫も行った。資料の話聞きながら、児童は自分自身に置き換えたり、自分のこととして考えたりすることで、道徳的価値の自覚を深めることができた。

〈キーワード〉 ①生命尊重 ②身近な人の体験談 ③実話資料 ④提示方法

1 研究の目標

今の自分にできることは何かを考える力を育成するために、生命尊重の内容項目を扱った道徳授業において、「いのち」の大切さを実感させるような資料の開発及び指導の在り方を探る。

2 目標設定の理由

テレビや新聞等で、信じられないような殺人事件がたびたび報道される。痛ましい事件が続く中、児童の心の教育の大切さが叫ばれている。そのような中、ユネスコが行った調査（2007年）から、我が国の青少年は、世界的に見ても自己肯定感や自己有用感が極めて低いことが分かった。先に掲げた諸問題と、青少年の心の内面との関連は決して無関係ではない。このような現状から、小学校段階からの道徳教育が、自分の将来に夢や希望をもって生きようとする心を育成する上で重要になる。そして、その中核にあるのが道徳の時間である。学校教育全体で行われる道徳教育の要として今後一層重要になってくる道徳の時間において、自分の将来に夢や希望をもって生きようとする心を育成するために、自分の存在にもかかわるともいえる「いのち」の教育、つまり生命尊重の内容項目を扱った道徳授業の果たす役割は極めて大きいと考える。

そこで、本研究では、児童の心に響く道徳授業を行うために、「いのち」に関する体験談を児童に身近な人から集めて資料化し、道徳の時間の中で取り上げることにした。なお、児童にとって資料の内容理解と登場人物の心情把握の支援になるように資料提示の方法を工夫することにした。幅広い概念である「いのち」を、生活体験の少ない小学生に実感として味わわせるために、「いのち」を見詰める視点をもってねらいを焦点化し、授業の配列も工夫することにした。

資料の登場人物の体験や心情に自分を重ね合わせて「いのち」を実感することができれば、ねらいとする道徳的価値の内面的自覚を図ることができ、将来に夢や希望をもって生きていこうとする児童の育成につながると考える。そして、自分の将来に夢や希望をもつことができれば、今の自分にできることは何かを考える力、すなわち、研究課題であるよりよく判断する力の育成につながるものと考え、本目標を設定した。

3 研究の仮説

児童が体験した「いのち」にまつわる体験作文や、児童に身近な人（保護者や担任）の体験談を資料化し、資料の内容理解及び登場人物の心情把握を容易にするためにその提示方法を工夫すれば、自分のこととしてより身近に「いのち」を考えることができるようになり、生命尊重の道徳的価値を内面的に深く自覚することができるであろう。

4 研究の内容と方法

- (1) 文献や調査資料を基にした資料の開発と資料提示の方法についての理論研究
- (2) 「いのち」に関するアンケート調査を基にした児童の実態調査
- (3) 仮説を検証するために、所属校の3年生における生命尊重の内容項目を扱った授業実践

5 研究の実際 1（実話資料開発）

(1) 研究の全体構想

児童に自分自身の「いのち」を実感させるため身近な人から体験談を集め、授業を意識して手を加えた実話資料を活用して道徳授業を行う。図1が本研究の全体構想図である。

授業を意識した上で体験談に修正を加え、授業で活用できるようにするが、そのまま授業で読み聞かせするだけでは道徳的価値を内面的に自覚させるには難しい。そこで、2つの手立て（資料提示の方法の工夫・ねらいを焦点化した授業の配列の工夫）を意図的に組み合わせていくことにした。2つの手立てを取り入れながら、「いのち」の授業を行えば、ねらいとする生命尊重の道徳的価値を内面的に自覚させることができると考えた。さらに、「いのち」を異なる視点から深く見詰めさせる授業の配列を考えることで、自分自身の将来に夢や希望をもって生きていこうとする心まで高めていくように考えた。

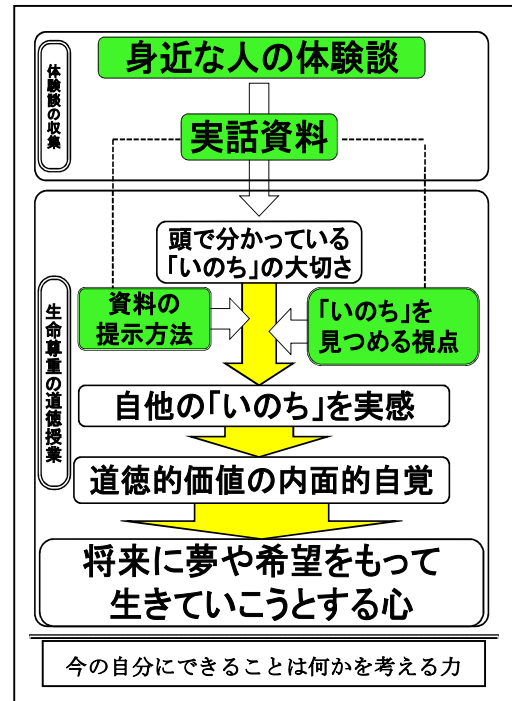


図1 全体構想図

(2) 身近な人の体験談からの実話資料作成のポイント

ア 実話資料の授業化と留意点

実話資料を授業の直前に集めようと思っても集まりにくい。そのため、表1のような手順と授業化の留意点を考えた。

なお、ここで実話資料の授業化としているが、資料提供者の同意があつての実話資料なので、授業前後の許諾や連絡についても授業化として、ここでは加えることにした。

表1 実話資料の授業化と留意点

	手 順	授 業 化 及 び 授 業 後 の 留 意 点
1	体験談の収集	<ul style="list-style-type: none"> ・ 道徳授業公開の際など、機会を見つけて保護者・地域に向けて呼びかけたり、職員室で話題にしたりして、素材になる体験談を集めるようにする。 ※ 書いていただく場合には、体験談の依頼文だけでなく、封筒と便せん、そして、ねらいなどが分かるような例文も付けて渡す。 ・ 出向いて取材を行ったり、関連箇所を撮影したりして、事実を想起できるような資料をできるだけ収集する。 ・ 日常的に、無理なく資料収集を行う方が、じっくり執筆者の思いにより深く迫ることができる。また、素材となる話を多く蓄積しておくことで、授業のねらいや児童の実態に対して柔軟に対応できる。
2	体験談の分類	<p>集まった体験談は、大きく「生の喜びに関する話」「死の悲しみに関する話」「いずれにも属さない話」の3つに分けて分類・整理をして、保管する。</p> <p>また、いつのものか分かるように日付を付けて、地区名や執筆者の名前も忘れないように記載しておく。</p>

3	体験談の資料化	手紙や作文など文書形式の場合は、繰り返し読み込むことで話の中の人物の気持ちや執筆者の思いを理解する。内容によっては、悲しみなど心の痛みを十分に配慮して、資料化に臨まなければならない。
4	授業 (提示の工夫)	本時のねらいを決め、ねらいに迫るための発問構成を考える。また、資料の提示方法について検討する。このとき、安易な改作にならないよう、執筆者の思いを尊重しつつ改作する必要がある。
5	授業前の許諾	体験談を提供して頂く際にも伝えてあるが、授業計画を立てて見通しが立ったところで、再度、執筆者に授業の内容や資料の活用目的を説明して、使用許可（※実名の使用許可も含めて）を頂く。
6	授業後の報告	授業後、お礼の連絡とともに、授業の結果に関して、資料提供者への連絡をする。

イ 第2時「会話」：体験談の収集から資料化に至るまで

第1時と2時の資料作成手順は似ているので、ここでは、第2時における資料作成の実際について触れる。

第2時の資料は、表1に示した手順で道徳の授業公開のときに呼び掛け、保護者の方から寄せられた体験談である。まず、繰り返し読み、読みながら心に浮かんだことを、図2のようにノートに忘れないようにメモをしていった。また、資料中に出てくる人の心の動きを言葉で表し、その動きの流れが分かるように整理するようにした。

授業の前には、保護者への連絡をし、使用許可を頂いて実施した。

ウ 第3時「君を忘れない」：取材による情報収集

第1・2時と異なり、第3時では関係者の方と直接会って話を聞いたり撮影を頼んだりして資料作成を行った。

第3時で扱った資料は、この出来事にかかわる人達の思いが言葉で表しにくかったので、直接関係者から話を聞き、授業のねらいに合わせて集まった情報を精選していくことにした。

このときも、資料関係者に対して授業の前に学習のねらい等を伝え、資料の使用許可を頂くことができた。また、実名の使用許可も頂き、授業の中で実名を使用することができた。

(3) 検証の視点

検証番号	授業の仮説	検証の内容
I	体験談を基にした実話資料による関心・意欲の高まり	実話資料の内容に関する関心や意欲の高まりを、授業後のアンケートとワークシートの記述から検証する。
II	「いのち」を大切にしようとする意識の高まり	「いのち」を大切にしようとする心情の高まりを3時間の児童の感想を基に検証する。
III	資料の提示の仕方による資料への関心の高まり	資料の提示方法によって内容理解や心情把握が容易になされているかをワークシートの記述を基に検証する。

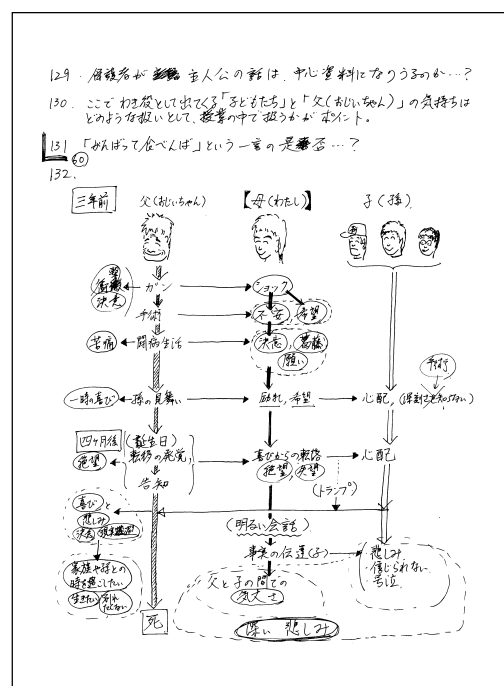


図2 第2時授業の資料分析

6 研究の実際 2 (授業実践)

(1) 資料提示の工夫について

体験談を資料化したことで、より授業で活用しやすくなったとはいえ、資料の内容を聞いて考えるのは児童である。どうしても削除できない言葉の中に難しい用語が出てきて場面や出来事の内容理解が難しかったり、体験したことのない出来事がある場合は、関係者の心情をつかみにくかったりすることが予想される。そこで、内容理解と心情把握を支援するために資料提示の方法を工夫することにした。資料の提示方法についてまとめたものが表2である。

表2 資料の表現形式の特徴と資料化へのポイントの例

	メリット	デメリット	資料化へのポイント
(発問ごとの)場面絵	限られた場面に絞って考えさせることができる。	絵の描き方によって伝わり方が異なるので、絵の表現力が問われる。	場面絵の側に、場面の内容を書いた短冊を掲示する。
紙芝居	豊富な絵があるので、思考する材料が多い。	紙芝居は読み終わったら、次の絵の後ろに消えてしまう。	ニードルを用意し、読み終わった絵を残していく。
視聴覚機器(映像・写真・CD)	現実に近い形での資料提示なので迫力がある。	事前の打合せを入念におかないとねらいを焦点化するのが難しい。	提示する資料に関する映像や写真をねらいに合わせて編集する。

(2) 実話資料を生かした道徳の時間の工夫

ア 「いのち」を見詰める5つの視点

授業のねらいを焦点化するために「いのち」を見詰める視点として、表3のように5つ定めた。ここで取り上げた「いのち」を見詰める視点は、『心のノート』で取り上げられている分け方を用いることにした。なお、本研究では、体験談の特質や児童の実態、及びめざす児童像を考慮して、以下の3つの視点を選択した。

表3 「いのち」を見詰める視点と本研究で活用した資料名

	視点	視点の説明	時間	資料名
1	唯一性	たった一つしかない「いのち」		※今回の検証授業では実施していない
2	偶然性	今、ここにいる不思議な「いのち」	1時目	『お誕生日おめでとう』
3	有限性	限りある「いのち」	2時目	『会話』
4	関係性	人に支えられ、人を支えている「いのち」	3時目	『君を忘れない』
5	連続性	ずっとつながっている「いのち」		※今回の検証授業では実施していない

イ 授業の配列の工夫

「いのち」とは何かと考えれば、とても広い概念である。そのため、「いのち」の大切さのどの側面から見詰めさせ、どういう順序で授業を行えばよいかまとめたものが図3である。

まず、1時目で「いのち」の偶然性に視点を当てた授業を行い、生きていることのもつ不思議さや喜びを実感させた。2時目では、「いのち」の有限性に視点を当てた授業を行い、大切な人の死が、深い悲しみをもたらすものであることに気付かせる。その際、「いのち」には、始まりと終わりがあることを改めて気付かせた。そして、3時目では、「いのち」の関係性に視点を当てた授業を行い、大切な仲間を思い、支え合って夢や希望に向かって生きる人達の姿に触れ、自らの限られた「いのち」を大切に生きるとはどのようなことかを考えさせた。

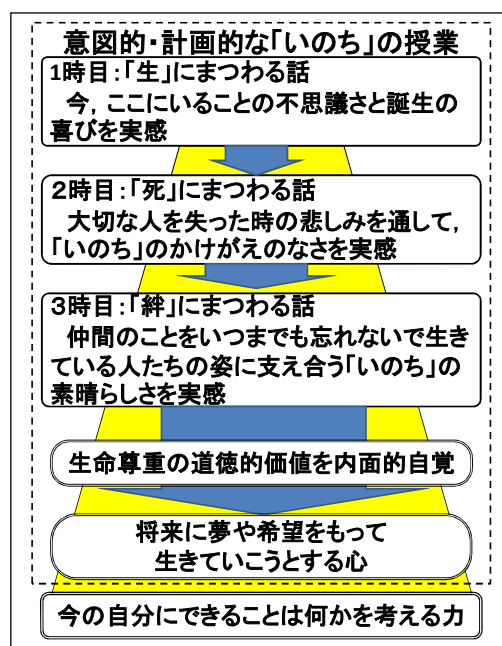


図3 指導計画

ウ 価値意識の継続

各時間が単発に終わらないように、それぞれの授業で深まった生命尊重の価値意識を次時の学習につなげるため、授業後にワークシートに感想を書かせ、授業で扱った資料のプリントとともに専用のファイルに綴じさせていくようにした。そして、授業の導入でファイルを振り返らせることで、前時の学習で学んだことを想起させ、授業に入るようにした。このように各時間に学んだことを関連付けながら学習させることで、自分自身の将来に夢や希望をもって生きていこうとする心情にまで深まるように計画した。

(3) 授業の実際（第3学年・全3時間）

授業時	資料名	主題名	ねらい（視点）
1時目	「お誕生日おめでとう」	愛されて生まれ、支えられている「いのち」	自分が愛されて生まれてきたことを実感させることで、自分の「いのち」を大切にしようとする心情を養う。（偶然性）
2時目	「会話」	限りある「いのち」	筆者の父と家族が過ごした最期の別れの時間を児童の心に深く受け止めさせることを通して、限りある「いのち」を大切にしようとする心情を深める。（有限性）
3時目	「君を忘れない」	夢や希望をもって生きる	亡くした友の「いのち」を忘れない同級生達の共通の思いが互いの心をつなぎ、夢に向かってくじげずに生きる姿に触れ、自分の将来に夢や希望を持って生きていこうとする心情へと高める。（関係性）

(4) 授業の実際と検証の視点の考察

ア 授業の実際（第3時 資料名「君を忘れない」）

	学 習 活 動	主 な 発 問	指導上の留意点（資料提示の工夫） <u>期待される児童の変化</u>	検証
展 開	1 学習課題を知る。	○ 「いのち」を大切にすることは、どのようなことでしょうか。	<ul style="list-style-type: none"> 前時を振り返る。 「いのち」を大切にすることは、という学習課題を提示し、ねらいへの方向付けとする。 	視点Ⅰ （関心・意欲） 視点Ⅲ （関心）
	2 資料「君をわすれない」を聞いて考える。 (1) 突然の死によりもたらされた悲しみを考える。 (2) 悲しみを乗り越える様々な行動について考える。	○ 校門に卒業生とその人たちの写真が残っているのを知っていますか。 ○ 突然の死に悲しんだ人達は誰でしょう。 ・ <u>Yさんの話（動画）</u> ○ 同級生達はこのようなことをしました。 ・ <u>Yさんの作曲（動画）</u> ・ <u>Tさんの習字（画像）</u> ○ 二人の心の中にある、同じ気持ちは何だろう。	<ul style="list-style-type: none"> 本校の校門に刻まれている卒業生の名前をスクリーンに映し出し、児童になじみの深い場面を見せることで、<u>関心を高めて</u>話に入る。 大切な人との別れについて仮想させ、十分黙考させた後、ビデオ映像で、<u>同級生の当時の思いを視聴させ</u>、悲しみの深さ感得させる。 立ち直れない程の悲しみの中、友のために詩「君を忘れない」を作り、Yさん達が曲を付け、そしてTさんが習字で歌詞を残したという<u>事実を</u>、臨場感をもたせるために動画や画像を使って提示する。 同級生の思いが、全校を突き動かし、やがて全市へと広がっていったことを考えさせた後、<u>市内音楽会で録音された合唱を聴かせ</u>、感動を味わわせる。 Yさんの今を伝えることで、失った友の「いのち」を忘れないでいることは、同級生たちの心の中に友の「いのち」が生き続けることを意味し、そのことが人生の局面においても夢を諦めずに頑張ることにつながっていることに気付かせる。 	
	(3) 自分の目標に向かって頑張っている同級生を突き動かしているものについて考える。	○ 同級生たちは、夢に向かって頑張っています。 ○ 天国にいる友達は、一生懸命生きている仲間を見て何と申すでしょう。	<ul style="list-style-type: none"> 自分達の夢に向かって頑張ることが、心の中で生き続ける友が望むことだということに気付くことができる。 	
終末	3 教師の説話を聞く。	○ 先生は、この方たち取材してきて「いのち」を大切にすることは、こう思いました。	<ul style="list-style-type: none"> これまでの学習を振り返った上で、学習課題に戻り、限りある「いのち」を大切にすることとして、日々を夢や目標に向かって生きていくことも上げられることを話して聞かせる。そして、夢や目標をもって生きていくためには、これまで学習してきた家族や仲間の支えやつながりが大切であることに気付かせる。 	

イ 体験談を基にした実話資料による関心・意欲の高まり（検証の視点Ⅰ）

授業の中で、児童に身近な人が実際に体験された本当の話であることを伝えると、「えー」という反応を示し、資料中に出てくる身近な人物や場所に対していろいろなつぶやきが聞こえた。

3時間の授業が終わったところで、「本当の話を聞いてどう思いましたか」というアンケートを取ったところ、図4のように23人中ほとんどの児童が「すごく心に残った」や「真剣になれた」という項目を選択していた。

例えば、A児は、「いろいろな人の心が分かったから真剣になれたのかもしれませんが」と記述している（図5）。また、B児は授業の中で資料として取り上げた歌が印象に残り、「わたしは『君を忘れない』という歌を絶対忘れません」というように記述している（図6）。

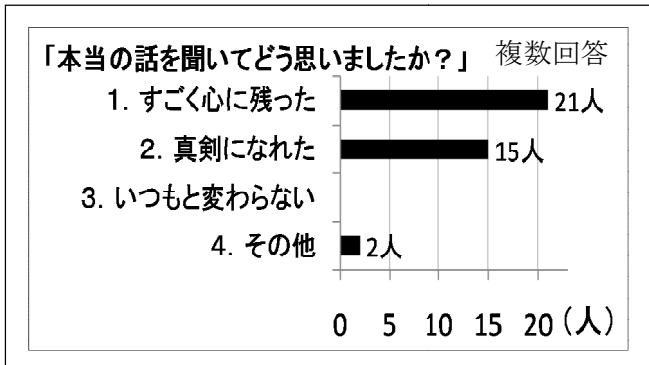


図4 実話資料の効果に関する調査結果

(わけ)なせすごく心に残ったかそれがいけなかったか
 していつのかたしここにのこりまし
 た。そして真剣になれました。
 それはおいしくなる人のこころがわ
 かったこと、真剣になれたことか
 もしも。

図5 A児の感想

べんきょうをしたときとても命は大切
 だと思いました。そのときに心に
 とききました。もしわたしがその人た
 ら歌をつくらに天国からありがとう
 といいます。わたしは、きみを忘れな
 いという歌は、とてもいい歌だ
 と思いました。わたしは、命のべんき
 ょうをして、すごく心にのこりました。わた
 しは、命は大切だ。と思いました。
 わたしは、命のことをしれてほん
 とよかったです。わたしは君を忘
 れないという歌を絶対忘れません。

図6 B児の感想

ウ 「いのち」を大切にしようとする意識の高まり（検証の視点Ⅱ）

授業後、児童が書いた感想を見ると、ほとんどの児童に共通して見られたことがあった。資料中の出来事と同じ体験をしたことのある児童は、自分自身の体験を振り返って「いのち」の大切さに触れている。また、同じような体験をしたことのない児童は、資料中の出来事に自分自身を置き換えて考え、その上で「いのち」の大切さについて考えていた。児童の書いた感想の中から記述を基に、価値意識を表4のように①②③の3グループに分けてみた。

表4 児童感想から分かる価値意識の高まり

	①	②	①・②(両方)	③
1時目「お誕生日おめでとう」(偶然性)	4人	13人	1人	5人
2時目「会話」(有限性)	10人	10人	3人	0人
3時目「君を忘れない」(関係性)	0人	17人	0人	6人
① 資料中と同じ体験を想起し、「いのち」の大切さについて見詰め直した記述				
② 資料中の内容に自分自身を仮想し、「いのち」の大切さについて考えた記述				
③ その他(①・②いずれにも属さない記述)				

①・②, 2つのグループの相違点を整理する。まず、違うところは、資料中の出来事と同じような体験をしたことがあるかないかである。そして、同じところは、自分の「いのち」を見詰め直し、その大切さを考えている点である。つまり、23人中1時目では18人、2時目では23人、3時目では17人の児童が、資料中と同じような「いのち」にまつわる体験を振り返ることを通して、もしくは、自分自身に置き換えることで、資料に出てきたような「いのち」について自分のこととして考えることができている。実話資料を通して「いのち」の大切さについて考え、自分自身の「いのち」の大切さを実感として受け止めることができたと考える。

実話資料を通して自分自身の「いのち」の大切さを見詰めることができた児童の中から、C児の感想を取り上げて、生命尊重の価値意識の高まりについて考察する。C児は、1時目の授業で、同じ体験をしたことがなかったが、もし、自分に資料と同じ出来事があったらと仮定した上で、自分や兄弟の「いのち」が、今、存在することの不思議さに気付いている(図7左)。そして、2時目の授業では、C児は全く同じ体験をしていた。そのとき、「頭が痛くなるまで泣きました」と書いていた(図7中央)。3時目では、誕生の喜びに包まれて始まった「いのち」にも、やがて終わりが訪れ、そのときに残された人の気持ちは、前の時間にどうだったか、授業の初めに振り返らせた。そして、誕生で始まり、死で終わる「いのち」をどう生きていくことが、「いのち」を大切にすることになるのかを考える時間にした。すると、C児は、支え合って生きている資料中の人達の生き方に感動し、自分も夢をかなえ、自分の「いのち」を輝かせようとする意欲につながった(図7右)。

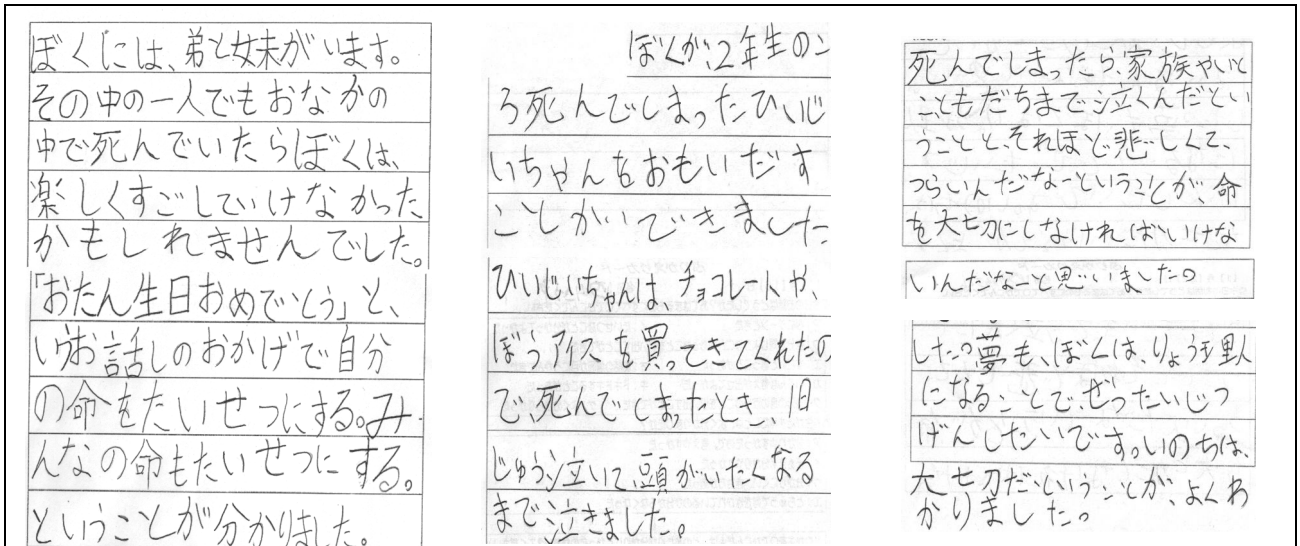


図7 C児の授業後の感想(左から1時目・2時目・3時目)

エ 資料の提示の仕方による資料への関心の高まり(検証の視点Ⅲ)

1時目の授業では、教師の範読後、あらすじに沿って発問をし、同時に関係する場面絵を黒板に張って考えさせる提示の仕方である。場面絵だけの掲示では、児童の中には、場面を勘違いする子も出てくることがあるので、絵の上に何をしている場面かが分かるように短冊を作って掲示した。D児は、「絵を見ながら気持ちや感想がいてよかった」(図8)ということを感じて書いていた。

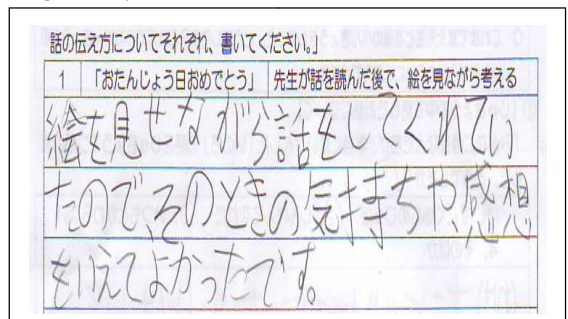


図8 第1時の感想(D児)

2時目の授業では、7枚の場面絵を使って紙芝居のようにして資料提示を行った。「声色や間」を工夫しながら資料を読み聞かせ、「場面絵」については、次の場面への期待感を高まらせるような絵の抜き方に注意し、また、終わった場面絵も内容理解に役立てるために、ニードルに立てて並べてい

くようにした。E児は、「考えやすいから」（図9）という感想を書いていた。

3時目の授業では、直接取材をして集めた本物の写真や本人に出演していただいた映像、そして、当時の本物の歌声が録音された「君を忘れない」というCDを活用した資料提示を行った。F児は、「ビデオだったからそのときのことがよくわかった」（図10）と感想に書いていた。

このような記述から、実資料の中にある出来事を、授業のねらいや児童の実態を考慮して、提示方法を工夫することが内容理解や心情把握の面で効果的であることが分かった。

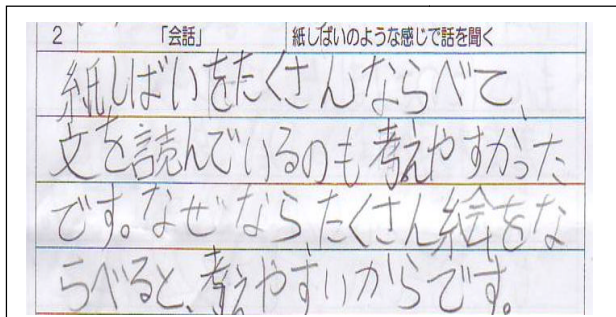


図9 第2時の感想（E児）

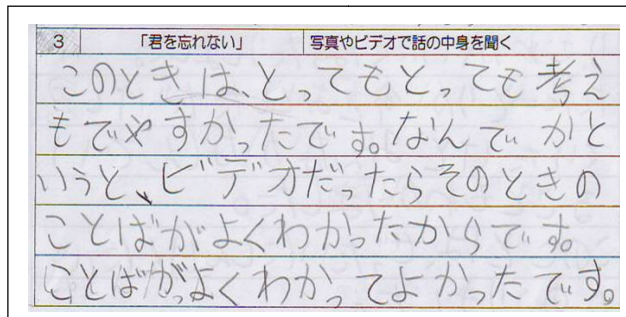


図10 第3時の感想（F児）

7 研究のまとめと今後の課題

(1) 研究のまとめ

ア 児童に身近な人達の体験談を、授業を意識して改作した実話資料を授業で活用すると、児童は「いのち」を自分自身のこととしてとらえて考えることができるようになる。

イ 「いのち」を見詰めさせる際に視点をもってねらいを焦点化した授業を行い、授業の配列も考えれば、児童の生命尊重の道徳的価値の自覚は深まると考えられる。

ウ 実話資料の内容を理解させ、登場人物の心情を把握させるためには、資料の提示方法を工夫することが必要である。

(2) 今後の課題

身近な出来事を素材にしているため、資料に込められた情報量は膨大であることから、資料の精選とねらいを焦点化した活用を心掛けなければならない。

《参考文献》

- ・ 瀬戸 真編著 『自己を見つめる』 昭和61年 教育開発研究所
- ・ 金井 肇 『道徳教育の基本構造理論』 1996年5月 明治図書